12 月 25 日のメッセージ

聖書：ルカによる福音書　2：　1－20

「さあ、ベツレヘムへ行こう」

「クリスマスおめでとうございます。」私たちは毎年、こうしてクリスマスを祝うことができます。しかも、今年は久しぶりに 12 月 25 日が日曜日。しっかりと 4 週間待ち続けて、そして今日を迎えることができたこの喜びはひとしおでしょう。

「エフラタのベツレヘムよ／お前はユダの氏族の中でいと小さき者。」(ミカ書 5:1)

2000 年前のあの日、イスラエルの小さな街ベツレヘムは、取り立てて何もない小さな街でした。その小さな街の片隅で新たに誕生した小さな命のことなど、誰も気にかけることのない街でした。

しかし神は、この小さな街にこそ、救い主が現れると、すでに約束なさっていました(「お前の中から、わたしのために／イスラエルを治める者が出る」ミカ書 5:1、「彼は立って、群れを養う／主の力、神である主の御名の威厳をもって。彼らは安らかに住まう。」ミカ書 5:3)。それでも人々はまだ気づきません。

この喜びの出来事が最初に知らされたのは、街から離れ、広い草原で野宿をしていた羊飼いたちでした(「その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。」ルカによる福音書 2:8)。

絶えず外敵に襲われる不安の中で過ごしていた彼らにとって、平安とは「何事も起こらないこと」だったことでしょう。まして、民全体のことなど気にかけている余裕など無かったはずです。

そこに、天使が現れます。イレギュラーな出来事に怯える顔が目に浮かびます。「恐れるな」「民全体に与えられる」(ルカによる福音書 2:10)と言われたところで、「自分とは関係ない」と思ったかもしれません。

「天は主の正しさを告げ知らせ／すべての民はその栄光を仰ぎ見る。」(詩編 97:6)などという言葉も知らなかったでしょう。告げられた言葉の正しさよりも、自分たちの安心が先に立っていました。

ところが、羊飼いたちは次に聞こえてきた言葉に我が耳を疑います。

「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。」(ルカによる福音書 2:11)

救いなど、とうの昔に諦めていた自分たちのために、救い主が来てくださる。「あり得ない」「いや、あり得るのか」と自問自答します。

それでも、続く天使の言葉が羊飼いたちの背中を押しました。

「あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」(ルカによる福音書 2:12)

自分たちが信じようと信じまいと、救いは確実にやってきている。諦める必要など無かったのだ。ならば、ありがたく救い主に会いに行こうではないか。「さあ、ベツレヘムへ行こう。」(ルカによる福音書 2:15)という言葉には、彼らの安心と喜びが見えます。

今、私たちは何の不安もなく羊飼いたちの後に続くことができます。しかし、世界に目を向ければ、このクリスマスの時、私たちと同じように祝うことのできている者もいれば、寒さの中、震えている者たちがいます。戦火の中、怯えている者がいます。同じクリスマスの喜びの時を共に過ごすことができない者たちがいることもまた現実なのです。

今、救いと平安を諦めつつある友に向かって、私たちも共に呼びかけたいのです。「実に、すべての人々に救いをもたらす神の恵みが現れました」(テトスへの手紙 2:11)。「さあ、一緒にベツレヘムへ行こう」と。

共に平安を、救いを味わい、平和を実現するクリスマスを過ごしたいと願います。